

## 寂蓮の私撰和歌集入集歌について

—『秋風和歌集』『後葉和歌集』『資賢集』『為季集』『光俊集』『為兼集』(前集)を中心として—

半田公平

### 一

寂蓮の私撰和歌集入集歌は、生存時の作品として『言葉和歌集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』がある。没後成立の作品は数多くあり、『御裳濯和歌集』を初めとして『万代和歌集』『秋風和歌集』『雲葉和歌集』『夫木和歌抄』『拾遺風躰和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『新三井和歌集』『後葉和歌集』等がある。その他、『題林愚抄』『明題和歌全集』を資料として成立した私家集名を冠した私撰集である、『資賢集』『為季集』『光俊集』『為兼集』(前集)『元可集』『義満公集』『済継集』等、また、『明題拾葉抄』『類題和歌集』等に入集している。

寂蓮の私撰和歌集入集歌の内、一部の作品については別稿<sup>(1)</sup>において考察を加えた。その折『秋風和歌集』について考察し漏らしたので本稿において表題の五私撰集と共に採りあげ考察を加える。最初にそれぞれの私撰集の従来の研究を基として、作品の書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、寂蓮歌についてみるが、本稿で採りあげる私撰集には独自歌が見出せないで和歌を揭示し、出典を示す。引用の和歌は『新編国歌大観』『図書寮叢刊』『古典文庫』『続群書類従』所収本

に拠った。

## 二 『秋風和歌集』

この作品の従来の研究については、『図書寮典籍解題 続文学篇』<sup>(2)</sup>・安井久善<sup>(3)</sup>・有吉保<sup>(4)</sup>・青木賢豪<sup>(5)</sup>・橋本不美男<sup>(6)</sup>・小池一行<sup>(6)</sup>の各氏に拠って考察されている。撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

撰者は、右大弁光俊（真観）である。『前長門守時朝入京田舎打聞集』に、

秋風集に入る歌一首 右大弁光俊朝臣撰

二 かきくもりしぐるるそらをかごとにてこぬ夜のとおこのふけにけるかな（恋上・七七二）

とあり、また、『代集』に「打聞 秋風集 光俊朝臣撰」とあることから光俊撰とされている。

光俊（真観）は、建仁三年（一二〇三）に生まれ、建治二年（一二七六）六月九日、七四歳で没した。俗名は葉室光俊、真観は法名である。父は権中納言光親。母は藤原定経の女で順徳院乳母経子。嘉祿三年（一二二七）右少弁、官位は正四位下右大弁に至ったが、嘉禎二年（一二三六）出家した。寛喜・貞永（一二二九～一二三二）頃定家門に入り和歌を学び、貞永元年『日吉社撰歌合』『石清水若宮歌合』に出詠し、『新勅撰集』に四首入集した。御子左派の為家等に対抗する反御子左派を結集して活躍した。文応元年（一二六〇）鎌倉に下向、將軍宗尊親王の和歌師範となり、その勢威を背景にして、弘長二年（一二六二）『続古今集』の撰者に加えられた。文永三年（一二六六）宗尊親王の失脚と共に真観等反御子左派勢力は崩壊した。真観の関与した著作に、『万代和歌集』『新撰六帖題和歌』『現存和歌六帖』『閑窓撰歌合』『石間集』（散佚）等及びこの『秋風和歌集』と密接な関係がある『秋風抄』がある。歌論書に『簸河上』がある。鎌倉中期歌壇において御子左派に対抗した第一人者として重要な位置を占める。

成立は、建長三年（一二五一）末頃と推測されている。

内容、序・跋はなく、全二〇巻から成る。部立、収載歌数は、巻一春歌上・五九首、巻二春歌下・七六首、巻三夏歌上・四五首、巻四夏歌下・四六首、巻五秋歌上・一一三首、巻六秋歌下・一〇六首、巻七冬歌上・五六首、巻八冬歌下・五七首、巻九釈教歌・四六首、巻十神祇歌・三五首、巻十一賀歌・三九首、巻十二恋歌上・一二二首、巻十三恋歌中・一〇六首、巻十四・恋歌下・八五首、巻十五離別歌・二三首、巻十六羈旅歌・四九首、巻十七雜歌上・九一首、巻十八雜歌中・九〇首、巻十九雜歌下・八一首、巻二〇雜歌・三首、施頭歌・五首、誹諧歌・二四首、物名・一四首、折句・四首、総歌数は一三六五首である。

撰集資料は、平安・鎌倉時代の歌合・定数歌・私家集等から選歌し、『老若五十首歌合』『千五百番歌合』『建仁三年九月十三夜影供十首歌合』等、定数歌は『堀河百首』『久安百首』『正治百首』『光明峯寺撰政家百首』『洞院撰政家百首』『宝治百首』等である。

入集歌数の多い歌人は、道家・三四首、後鳥羽院・三二首、定家・三一首、実氏・二七首、家隆・二五首、後嵯峨院・家良・二三首、俊成・知家・為家・二一首等で、撰者である真観の詠歌は撰入していない。寂蓮は三首である。

伝本は、宮内庁書陵部蔵の江戸中期写本(501・127)が孤本で伝わるのみであり、安井久善<sup>(3)</sup>・橋本不美男<sup>(6)</sup>・小池一行の各氏に拠って翻刻・解題が成されている。『新編国歌大観』に拠って寂蓮歌を示す。

#### 巻六 秋歌下

##### 建仁の五十首歌合歌

寂蓮法し

四一〇 かきくもり時雨ふるなりすがはらや ふしみのと山色かはるまで

#### 巻十三 恋歌中

##### だいしらず

寂蓮

八七三 身のうさを思ふなみだもかはらねば うらみぬそでと誰かみるべき

卷十七 雑歌上

千五百番歌合歌

寂蓮法し

一〇八三 昔ともおもひなすべき身のほどを はなたちばなにとふ人もがな

寂蓮歌は以上の三首入集しており、四一〇番歌は、建仁元年（一二〇一）二月十六・十八日の『老若五十首歌合』（百卅五番左、寂蓮、右勝、後鳥羽院）の詠歌であり、第二句「時雨もいまは」と異同がある。

八七三番歌は、正治二年（一二〇〇）十一月二三日披講の『正治二年院初度百首』（恋・一六八一番）の詠歌であり、第三句「かはらねど」と異同がある。

一〇八三番歌は、建仁元年（一二〇一）の『千五百番歌合』（夏二・四百七番、対左良経）の詠歌である。  
以上三首共に先行の撰集に入集しており、独自歌はなく、既に拙著<sup>(7)</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

三 『後葉和歌集』

この作品の従来の研究については、『図書寮典籍解題 続文字篇』・井上宗雄<sup>(9)</sup>・福田秀一<sup>(10)</sup>、『図書寮叢刊 後葉和歌集』・三村晃功<sup>(12)</sup>・有吉保<sup>(13)</sup>・大島貴子<sup>(14)</sup>・小池一行<sup>(15)</sup>の各氏に拠って考察されている。書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

平安末期に藤原為経の撰した『後葉和歌集』とは同名異書の類題私撰集である。

書名は井上宗雄氏<sup>(9)</sup>に拠ると、実教撰の『藤葉集』に対してつけられた名かも知れないとされている。撰者は未詳である。

成立は、三村晃功氏<sup>(12)</sup>に拠ると、二三八二首が『題林愚抄』を出典としており、その成立は、文安四年（一四四七）八月十一日以降文明二年（一四七〇）四月上旬の間と推定されており、それ以後と見られるが、出典一位（二七二首）の実朝の歌が、柳営亜槐と奥書のある『金槐集』の系統本（貞享版本系）に拠っているらしく、この系統本は、柳営亜槐を義政とし、

その権大納言時代、宝徳二年（一四五〇）（長祿二年（一四五八）に成立したとみられるから、『後葉集』成立の上限はその頃になるとされている。

内容、序・跋はなく、全十巻から成る。部立、歌数は、『図書寮叢刊 後葉和歌集』<sup>(11)</sup>（底本、谷森本 谷・311）に拠ると、巻一・春部上・四四一首（歌欠二）、巻二・春部下・三三七首（歌欠二）、巻三・夏部上・四〇一首（歌欠四）、巻四・夏部下・二二〇首（歌欠一）、巻五・秋部上・五一一首、巻六・秋部下・三一五首、巻七・冬部上・三六三首、巻八・冬部下・二三四首（歌欠四）、巻九・恋部・二九〇首、巻十・雑部・二八七首（歌欠一）、総歌数は三三七九首（歌欠一四）である。撰集資料は、奈良・室町期の勅撰集・私撰集・私家集・歌合・定数歌等の先行の和歌資料を用い、撰入に際しては依拠した資料の作者表記等をそのままの形で使用している。

入集歌人は七九四名。歌数の多い歌人は、実朝・二七四首、良経・六六首、定家・六一首、為氏・四九首、為家・四三首、俊成・後嵯峨院・四二首、俊頼・四一首、家隆・四〇首等であり、寂蓮は七首（歌欠一、重出一）である。

伝本は、宮内庁書陵部蔵・谷森善臣旧蔵本（谷・311）、島原市立図書館松平文庫蔵本、東京大学国文学研究室蔵本居文庫本の三本がある。谷森本を底本として『図書寮叢刊 後葉和歌集』<sup>(11)</sup>に翻刻・解題が成されている。その本文に拠って寂蓮歌を示す。

#### 巻一 春上

（春晚）

寂蓮法師

369 今はとてたのむの雁のうち侘ぬ 朧月夜の明ほの、空（六百番歌合・春・春曙。新古今・春上・五八。題林愚抄・春二・七〇一）

（春糸）

寂蓮法師

439 春風の長閑に吹は青柳の 枝もひとつに遊いとゆふ（六百番歌合・春・遊絲。題林愚抄・春二・八二四）

卷三 夏上

(新樹)

寂蓮法師

808 春ふかき野へのけしきとみし程に 緑はやとのこすゑなりけり (六百番歌合・夏・新樹。題林愚抄・夏上・一七〇七)

鵜川

寂蓮法師

1101 うかひ舟たかせさしこすほとなれや むすほ、れ行か、り火のかけ (六百番歌合・夏・鵜川。新古今・夏・二五二。題林愚抄・夏中・二四〇六)

卷四 夏下

夕立

寂蓮法師

1213 谷川のなかれをみてもしられけり 雲こすみねの夕立の空 (六百番歌合・夏・夕立。続拾遺夏・二〇四。題林愚抄・夏下・二五九〇)

(夕立)

寂蓮法師

1217 谷川のなかれをみてもしられけり 雲越峰の夕立の空 (一二一三、重出)

卷五 秋上

(鹿)

寂蓮法師

1813 おのうへの門田にかよふ秋風に 稲葉を分るさをしかのこゑ (千載・秋下・三三五。題林愚抄・秋二・三六五二)

卷七 冬上

(落葉)

寂蓮法師

2316 軒ちかき峰のあらしも心せよ 木のはならてはくもる宿かは (千五百番歌合・冬一。題林愚抄・冬上・五〇三三)

卷八 冬下

(雪)

本  
寂蓮

2686

(歌欠)

寂蓮歌は以上の八首入集しているが、<sup>1213・1217</sup> 番歌は重出歌であり、それを除くと七首となる。

『図書寮叢刊 後葉和歌集』<sup>(11)</sup>の「解題 四歌人」(442頁上)の項に作者表記の誤りとして、「一二〇九 家隆卿 寂蓮 六 百番歌合」とある。

#### 卷四

(夕顔)

家隆卿

1209 煙たつ賤の庵かうす霧の まかきにさける夕かほの花

この歌は『六百番歌合』(夏下・十五番・右)の詠歌で作者表記は「家隆」であり、『後葉集』の表記が正しい。

『後葉集』は撰集資料として、『題林愚抄』に依拠しているので、和歌の最後に出典及びその入集状況を記した。出典は『六百番歌合』(五首)、『千五百番歌合』(二首)、『千載集』(一首)、『新古今集』(二首)、『続拾遺集』(一首)である。以上七首共に先行の撰集に入集しており、独自歌はなく、既に拙著<sup>(7)</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

#### 四 『資賢集』

この作品の従来の研究については、橋本不美男<sup>(16)</sup>・八寫正治<sup>(16・17)</sup>・『図書寮叢刊 資賢集』<sup>(18)</sup>・三村晃功<sup>(19)</sup>・有吉保<sup>(20)</sup>・井上宗雄<sup>(21)</sup>の各氏に拠って考察されている。書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。書名に個人名が付してあるが、その家集ではなく、私家集名を冠した私撰集である。三村晃功氏に拠ると、『資賢集』収載歌中の唯一の出典不明歌、七四・二三六番歌に「資賢」の名があり、また、卷末二一五六番歌「資賢」の詠歌作者名をもつて編者は『資賢集』なる集名を付したのではなからうかとされている。

撰者は未詳である。

成立は、三村晃功氏<sup>(19)</sup>に拠ると、『資賢集』収載歌の最新の出典資料が『題林愚抄』であり、その成立は文安四年（一四四七）八月十一日以降文明二年（一四七〇）四月上旬の間と推定されている。従って『資賢集』の成立時期の上限は文明二年頃と推定されている。

以下私家集名を冠した私撰集について考察を加えるが、三村晃功氏<sup>(12・B)</sup>の一連の研究に拠って、『題林愚抄』に出典資料を仰ぐものが多く、その成立も文明二年（一四七〇）以降と推定されており、以下その説に拠る。

内容、序・跋はなく、部立は春・夏・秋・冬・雑・恋であり、末尾の順が雑・恋であるのが特殊である。収載歌数は、卷上・春・四五七首、卷上・夏・二三七首、卷中・秋・五四三首、卷中・冬・二〇二首、卷下・雑・三五三首、卷下・恋・三六四首で、総歌数二一五六首である。

撰集資料は、『題林愚抄』（二三一首）、『古今和歌六帖』（三九七首）、『俊恵集』（二〇四首）、『頼政集』（一四六首）、『好忠集』（六〇首）等が上位を占める。

入集歌数の多い歌人は、俊恵・二〇九首、頼政・一四五首、貫之・八八首、定家・六五首、俊成・六二首、好忠・六一首、家隆・五六首等であり、寂蓮は六首である。

伝本は、宮内庁書陵部蔵の江戸初期写本（155・39）が孤本で伝わるのみであり、『図書寮叢刊 資賢集<sup>(18)</sup>』に翻刻・解題が成されている。その本文に拠って寂蓮歌を示す。

上春

若草

寂蓮法師

126 春雨は去年みし野へのしるへかは みとりにかへる萩のやけ原（六百番歌合・春・若草。新千載・春上・三八。題林愚抄・春二・六六九）



(残春)

寂蓮

451 鶯の花のねくらはあれにけり ふるすにいまやおもひ立らん (六百番歌合・春・残春。題林愚抄・春四・一五二七)

上夏

(新樹)

寂蓮法師

492 春ふかきのへの気色とみしほとに みとりは宿の木すゑ也けり (六百番歌合・夏・新樹。題林愚抄・夏上・一七〇七)

中秋

(うつら)

寂蓮法し

918 茂き野とあれはてにける宿なれや まかきのくれにうつら鳴也 (六百番歌合・秋・鶉。題林愚抄・秋二・三六四四)

下恋

(寄雲恋)

寂蓮法師

2063 人しれぬうらみは空の雲なれや つもれはそての雨とふるらむ (六百番歌合・恋下・寄雲恋。題林愚抄・恋三・七四五)

四)

(寄木恋をよめる)

寂蓮法し

2109 ちきりきなまた忘れすはつせ川 古川のへの二もとの杉 (六百番歌合・恋下・寄木恋。続後撰・恋・八九八。題林愚抄・恋三・七七四二)

抄・恋三・七七四二)

寂蓮歌は以上の六首入集しており、『資賢集』は撰集資料として、『題林愚抄』に依拠しているので、和歌の最後に出典及びその入集状況を記した。前掲の如くすべて『六百番歌合』を出典としているが、『題林愚抄』は<sup>126</sup> (新千載集)、<sup>2109</sup> (続後撰集)の二首については勅撰集名(新千・続後撰)の表記をしている。以上六首共に先行の撰集に入集しており、独自歌はなく、既に拙著<sup>①</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

## 五 『為季集』

この作品の従来の研究については、島津忠夫・三村晃功・有吉保・井上宗雄の各氏に拠って考察されている。書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

書名は、前項(四)と同様に個人名が付してあるが、その家集ではなく、私家集名を冠した私撰集である。島津忠夫氏は「為季の名を書名に冠した因は未詳」とされている。三村晃功氏は『為季集』の集名となっている人物には二人がいるとして「生没年は未詳であるが、『千載集』初出の歌人で、右中弁為親の男、後に隆頼と改名した人物と、法性寺為盛の男で、宝徳三年(一四五二)非参議従三位、文明六年(一四七四)三月二十九日、六十一歳で没している人物がいる。」とされているが、結論として集名付与の問題は現在のところ未詳というほかはないとされている。

撰者は、島津忠夫氏は、「為季の撰んだ手控えの集か」とされ、三村晃功氏は、「二条派の末流か、飛鳥井家に関係する人物、さらに憶測するならば、一条兼良の傘下にあった人物が想定されるであろう」とされている。

成立は、『題林愚抄』と『耕雲千首』収載歌から抄出したものを中心として成っており、前項と同様に『題林愚抄』の成立は文安四年(一四四七)八月十一日以降文明二年(一四七〇)四月上旬の間と推定されている。従ってそれ以降室町中期頃の成立と推定されている。

内容、序・跋はなく、部立は、春・夏・秋・冬・恋・雑であり、作者名は記載していない。収載歌数は、春・四三三首、夏・二〇九首、秋・三六七首、冬・二〇五首、恋・二七八首、雑・三五九首、総歌数一八五一首である。

撰集資料は、『題林愚抄』(一二五九首)、『耕雲千首』(四九五首)、『林葉集』(二五首)等である。

入集歌数の多い歌人は、耕雲・四九五首、後嵯峨院・三五首、良経・三四首、為定・二七首、俊恵・為家・為世・二五首等であり、寂蓮は四首である。

伝本は、島原市立図書館松平文庫蔵の寛文・元禄期写本（131・2）が孤本で伝わるのみであり、三村晃功氏<sup>(23・B)</sup>に拠って翻刻・解説が成されている。その本文に拠って寂蓮歌を示す。

夏

（六百番歌合に）

四五九 春ふかきのへの気色とみしほとに緑はやとのこすゑなりけり（六百番歌合・夏・新樹。題林愚抄・夏上・一七〇七）

冬

（千五百番に）おなしこゝろを

一〇四〇 軒ちかき峯の嵐も心せよ木葉ならてはくもるやとかは（千五百番歌合・冬一。題林愚抄・冬上・五〇三三）  
恋

（尋恋、六百番歌合に）おなしこゝろを

一二八六 三輪の山杉立門をとへとたにたのためぬ道にまよふころ哉（六百番歌合・恋・尋恋。題林愚抄・恋部一・六四三三）  
六百番の哥合に

一三五二 わすらるゝ身をは思はず立田山心にかゝる沖つしらなみ（六百番歌合・恋・夜恋。題林愚抄・恋二・七三二九）  
寂蓮歌は以上の四首入集しており、『為季集』は撰集資料として、『題林愚抄』に依拠しているので、和歌の最後に出典及びその入集状況を記した。前掲の如く『六百番歌合』と『千五百番歌合』を出典としている。以上四首共に先行の撰集に入集しており、独自歌はなく、既に拙著<sup>(7)</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

## 六 『光俊集』

この作品の従来の研究については、島津忠夫<sup>(26)</sup>・安井久善<sup>(27)</sup>・井上宗雄<sup>(28)</sup>・福田秀一<sup>(29)</sup>・三村晃功<sup>(30)</sup>・有吉保<sup>(31)</sup>・拙著<sup>(32)</sup>の各氏に拠って

考察されている。書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

書名は、前項（四・五）と同様に個人名が付してあるが、その家集ではなく、私家集名を冠した私撰集である。光俊の名を付した理由は未詳である。

撰者は、奥書に、

右此一冊者先哲詠吟以所光俊朝臣

心用粗集之 云々

文明二庚寅年卯月上旬 西槐藤臣 判

とあり、安井久善氏<sup>(27)</sup>は光俊の撰かとされ、「西槐藤臣」については、西園寺実遠の筆、「西」を「亜」の誤写とすれば他の筆者も考えられないことはないとしておられる。三村晃功氏<sup>(30)</sup>は『私撰集伝本書目』の「文明二年雅親奥本の転」の注記、「西槐朝臣」の「西」を「亜」の誤写と推定して飛鳥井雅親を該当者としている説を支持しておられるが、誤写の多い点、重出歌の問題、『題林愚抄』の犯している誤注等から雅親編者説に疑問を呈しておられる。撰者については決定を見ていなく未詳である。

成立は、『題林愚抄』収載歌中から、新古今時代の歌人を下限にして、それより以前の歌人の詠歌を抄出したものを基幹として、それに『林葉集』と『頼政集』から採歌したものを添加、按配して成立した私撰集として規定されている。前項（四・五の項）と同様に『題林愚抄』の成立、文安四年（一四四七）八月十一日以降文明二年（一四七〇）四月上旬の間と推定されており、それ以後『光俊集』は成立したものとされている。

内容、序・跋はなく、部立は、春・夏・秋・冬・恋・雑であり、作者名は記載していない。収載歌数は、春・二〇八首、夏・一七五首、秋・三〇八首、冬・一八三首、恋・二八九首、雑・二二〇首、総歌数一三七三首（一七首重出）である。

撰集資料は、『六百番歌合』（二六四首）、『林葉集』（九二首）、『堀河百首』（四〇首）、『源三位頼政集』（一七首）、『千五

百番歌合』(一一首)等が上位を占める。

入集歌数の多い歌人は、定家・一一〇首、俊恵・一〇二首、俊成・一〇一首、家隆・九六首、俊頼・八〇首、良経・三六首、慈円・二七首、頼政・二三首、俊成女・二〇首等であり、寂蓮は一四首である。

入集歌は、三代集時代から新古今時代、新統古今集に及ぶが、新古今時代の歌人の詠歌が圧倒的に多い。

伝本は、島原市立図書館松平文庫蔵の寛文・元禄期写本(129・15)が孤本で伝わるのみであり、安井久善氏<sup>(27)</sup>に拠って翻刻・解説が成されている。その本文に拠って寂蓮歌を示す。

## 春歌

### (春晚)

七二 今はとてたのむのかりのうちわひぬおほる月よの明ほの、空(六百番歌合・春・春曙。新古今・春上・五八。題林愚抄・春二・七〇一)

## 夏歌

### 鵜河をよめる

三二五 うかひ船たかせさしこす程なれやむすほ、れ行か、り火のかけ(六百番歌合・夏・鵜川。新古今・夏・二五二。題林愚抄・夏中・二四〇六)

## 秋歌

### 月前松風

六一六 月は猶もらぬこのまも住よしの松をつくして秋かせそ吹(建仁元年八月十五日、撰歌合。新古今・秋上・三九六。題林愚抄・秋三・四二五三)

## 冬歌

(雪をよめる) おなし心を

八二四 ふりそむるけさに人のまたれつるみ山の里の雪の夕暮 (治承三年十月十八日、右大臣兼実家歌合。新古今・冬・六六三。題林愚抄・冬下・五七五四)

恋歌

(祈恋をよめる)

九一八 きふね川も、せの時もわけ過ぬれ行袖のすゑを頼みて (六百番歌合・恋上・祈恋。題林愚抄・恋一・六四六三)

(契恋をよめる)

九二七 頼むへきしちのまるねのことは、思ひたへねといはぬはかりそ (六百番歌合・恋上・契恋。題林愚抄・恋一・六五七三)

(別恋を)

九五七 逢までの思ひはことの数ならてわかれそ恋の初め也ける (六百番歌合・恋上・別恋。新後撰恋三・一〇二五。題林愚抄・恋二・六八二五)

(絶恋を)

九九二 思ひわひ哀いくよかまきの戸をしはしといわて月をみるらん (六百番歌合・恋上・絶恋。題林愚抄・恋二・七〇五八)

(夏恋をよみ侍ける)

一〇五〇 思ひあれは袖にほたるをつゝみてもいはゝや物をとふ人もなし (正治二年閏二月一日、左大臣良経家十題廿番撰歌合。新古今・恋一・一〇三二。題林愚抄・恋二・七二五五)

(夜恋をよめる)

一〇七七 わすらる、身をは思はてたつた山心にかゝるおきつ白浪（六百番歌合・恋上・夜恋。題林愚抄・恋二・七三二九）

（寄雲恋）

一〇九三 人しれぬ恨は空の雲なれやつもれは袖の雨とふるらん（六百番歌合・恋下・寄雲恋。題林愚抄・恋三・七四五四）

雑歌

山家送年

一二〇八 立いて、つま木おりこしかた岡のふかき山ちと成にける哉（文治三年十一月二日、結題百首。新古今・雑中・

一六三二。題林愚抄・雑上・九〇〇四）

（三月三日）

一三〇四 花の色は入日をのこす木のもとに春もくれ行三日月の陰（六百番歌合・春・三月三日。題林愚抄・公事・九七五七）

月多秋友

一三五七 高砂の松もむかしに成ぬへし猶行末は秋のよの月（建仁元年八月十五夜、撰歌合。新古今・賀・七四〇。題林愚抄・賀・一〇四四三）

寂蓮歌は以上の十四首入集している。安井久善氏<sup>(27)</sup>は寂蓮の入集歌を十五首とされている。

次の歌

（老恋をよめる）

一〇〇四 あか月にあらぬわかれも今はとてわか世ふくれはそふ思ひかは

この歌は『六百番歌合』（恋五・老恋、六番左勝）の定家歌である。従つてこの歌一首を除くと十四首となる。

『光俊集』は撰集資料として、『題林愚抄』に依拠しているので、和歌の最後に出典及びその入集状況を記した。『光俊集』

の撰集資料中、『六百番歌合』が一番多く入集しているが、寂蓮歌も十四首中九首入集している。『題林愚抄』の72（六百番・新古今）、315（六百番・新古今）の二首については勅撰集名（新古）の表記をしている。以上十四首共に先行の撰集に入集しており、独自歌はなく、既に拙著<sup>(7)</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

## 七 『為兼集』（前集）

この作品の従来の研究については、福井久蔵<sup>(33)</sup>・岩佐正<sup>(34)</sup>・谷亮平<sup>(35)</sup>・次田香澄<sup>(36)</sup>・実方清<sup>(37)</sup>・福田秀一<sup>(38)</sup>・土岐善麿<sup>(39)</sup>・井上宗雄<sup>(40)</sup>・小原幹雄<sup>(41)</sup>・三村晃功<sup>(42)</sup>・有吉保<sup>(43)</sup>の各氏に拠って考察されている。書名、撰者、成立、内容、伝本等についてまとめ、次いで寂蓮歌について考察を加える。

書名は、前項（四・五・六）と同様に個人名が付してあるが、その家集ではなく、私家集名を冠した私撰集である。三村晃功氏に拠ると、巻頭歌と巻軸歌が為兼の詠であるから、その点から『為兼卿集』と命名されたのではあるまいかとされている。

撰者は、三村晃功氏<sup>(42)</sup>に拠ると、室町中期以降では、二条派の末流か、飛鳥井家に関係する人物、江戸初期では、堂上派歌人に連なる人物などが想定されようが、現在のところ、未詳というほかはないとされている。

成立は、『為兼前集』の撰集源は『題林愚抄』と『耕雲千首』から成り、前項（四・五・六）と同様に『題林愚抄』の成立、文安四年（一四四七）八月十一日以降文明二年（一四七〇）四月上旬の間と推定されており、『為兼前集』の成立は、文明二年四月上旬以降となろうとされている。

内容は、『続群書類従』（第十六輯上、和歌部、卷四三二）所収本は、前集と後集の二部から成る。序・跋はなく、部立は、前集、春・夏・秋・冬・恋・雑であり、作者名は記載していない。収載歌数は、春・二二七首、夏・一二九首、秋・一四〇首、冬・八四首、恋・一一三首、雑・一〇六首、総歌数七八九首である。後集は部立はなく二七七首（内、三首重複）で、



前集との重複歌が四〇首ある。

撰集資料は、『題林愚抄』（五六二首）、『耕雲千首』（二二七首）であり、『題林愚抄』からの抄出歌の出典資料は、『龜山殿七百首』（六〇首）、『延文百首』（五七首）、『宝治百首』（四五首）、『永徳百首』（三五首）等が上位を占める。

入集歌数の多い歌人は、耕雲・二二七首、為世・七一首、為明・五〇首、為兼・四六首、為藤・四二首、為遠・三七首、為家・三一首等二条派の歌人の詠歌が圧倒的に多い。寂蓮は一首である。

伝本は、前掲の『続群書類従』所収本の他、宮城県立図書館伊達文庫、国立公文書館内閣文庫、岡山ノートルダム清心女子大学蔵本、島原市立図書館松平文庫蔵の写本、刊本として文政元年刊本がある。『続群書類従』所収本に拠って寂蓮歌を示す。

秋

鶉

しけきのとあれはてにける宿なれやまかきの暮に鶉なく也

この歌は『六百番歌合』（秋・鶉、二十四番右負、对者定家）の詠歌であり、独自歌ではなく、既に拙著<sup>(7)</sup>において考察を加えたので該当の項を参照されたい。

ここで以上のまとめをする。本稿で採りあげた私撰集の『秋風和歌集』には三首入集し、『後葉和歌集』は七首、『資賢集』は六首、『為季集』は四首、『光俊集』は十四首、『為兼集』（前集）は一首それぞれ入集している。独自歌はない。撰集資料は、『右大臣兼実家歌合』（一首）『寂蓮家之集』（一首）『結題百首』（一首）『六百番歌合』（二四首）『左大臣良経家十題廿番撰歌合』（一首）『正治二年院初度百首』（一首）『老若五十首歌合』（一首）『建仁元年八月十五日撰歌合』（二首）『千五百番歌合』（三首）等である。後の勅撰集の『千載集』（一首）を初めとして、『新古今集』（九首）『続後撰集』（一首）『続拾遺集』（一首）『新後撰集』（一首）『新千載集』（一首）に入集している。

『題林愚抄』に出典資料を仰ぐ私撰集では『六百番歌合』『千五百番歌合』『新古今集』に多く依拠しており、共通の寂蓮歌を撰歌している。独自歌はないが寂蓮の秀歌であり、それぞれの時代において評価されていたことをうかがうことができる。

注

- (1) (A) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について——「四季部」所収歌を中心として——」(『語文』第99輯、平成9年12月)。  
(B) 拙稿「寂蓮の『夫木和歌抄』入集歌について——「雑部」所収歌を中心として——」(『語文』第100輯、平成10年3月)。  
(C) 拙稿「寂蓮の私撰和歌集入集歌について——『言葉和歌集』『月詣和歌集』『玄玉和歌集』『万代和歌集』を中心として——」(『二松学舎大学論集』第41集、平成10年3月)。  
(D) 拙稿「寂蓮の私撰和歌集入集歌について——『雲葉和歌集』『拾遺風艸和歌集』『二八要抄』『六華和歌集』『新三井和歌集』を中心として——」(『二松学舎大学論集』第42集、平成11年3月)。
- (2) 『圖書寮編 圖書寮典籍解題 続文学篇』(昭和25年3月、養徳社)。「第二 私撰歌集 秋風和歌集」(55頁)の項。
- (3) (A) 安井久善『校本秋風和歌集とその研究』(昭和26年3月、私家版)。  
(B) 同『秋風和歌集』(『和歌文学大辞典』(昭和37年11月、明治書院)。  
(C) 同『秋風和歌集』(『古典文庫』260、昭和44年2月)。  
(D) 同『藤原光俊の研究』(昭和48年11月、笠間書院)。第二章、138頁～147頁。  
(E) 同『秋風和歌集』(『和歌大辞典』(昭和61年3月、明治書院)。
- (4) 有吉保編『和歌文学辞典』(昭和57年5月、桜楓社)所収「秋風和歌集」の項。
- (5) 青木賢豪『秋風和歌集』(『日本古典文学大辞典 第三巻』、一九八四年四月、岩波書店)。
- (6) 橋本不美男・小池一行『秋風和歌集』(『新編国歌大観 第六巻 私撰集編Ⅱ』、昭和63年4月、角川書店)、翻刻と解題。
- (7) (A) 拙著『寂蓮法師全歌集とその研究』(昭和50年3月、笠間書院)。  
(B) 拙著『寂蓮の研究』(平成8年3月、勉誠社)。
- (8) 注2の著書、「後葉和歌集」(60～61頁)の項。
- (9) (A) 井上宗雄「南北朝・室町期における和歌資料二つ——玄恵追悼詩歌と後葉和歌集」(『解釈』昭和32年9月)。後に『中世歌壇史の研究 室町前期〔改訂新版〕』(昭和36年12月、昭和59年6月改訂版、風間書房)所収。第四章・10、134頁～135頁。補説14、559頁～566頁。  
(B) 同「後葉和歌集」(『和歌文学大辞典』昭和37年11月、明治書院)。
- (10) 福田秀一『中世和歌史の研究』(昭和47年3月、50年8月再版、角川書店)。第四篇・第二章・三、759頁～761頁。
- (11) 宮内庁書陵部編『圖書寮叢刊 後葉和歌集』(昭和51年3月、明治書院)。

- (12) (A) 三村晃功『後葉和歌集』(別本)の成立」(『国語国文』昭和56年9月)。後に『中世類題集の研究』(平成6年1月、和泉書院)所収。第三章・第二節、495頁〜517頁。
- (B) 同『中世私撰集の研究』(昭和60年5月、和泉書院)。第三章・第二節・四、359頁。
- (13) 有吉保編『和歌文学辞典』(昭和57年5月、桜楓社)所収「後葉和歌集」。
- (14) 大島貴子『後葉和歌集』(『日本古典文学大辞典 第二卷』一九八四年一月、岩波書店)。
- (15) 小池一行『後葉和歌集』(『和歌大辞典』昭和61年3月、明治書院)。
- (16) 橋本不美男・八嶋正治『中世私撰集解題(その二)、資賢集』(『和歌文学研究』第15号、昭和38年7月)。
- (17) 八嶋正治『資賢集』(『和歌大辞典』)。
- (18) 宮内庁書陵部編『図書寮叢刊 資賢集 遺塵和歌集』(昭和52年3月、明治書院)。
- (19) 三村晃功『書陵部蔵『資賢集』の成立』(『語文』第38輯、昭和58年3月)。後に注12・Bの著書所収。第二章・第四節、120頁〜135頁。
- (20) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「資賢集」。
- (21) 井上宗雄、注9・Aの著書、補説14、559頁〜566頁。
- (22) (A) 島津忠夫『中世私撰集解題(その二)、為季集』(『和歌文学研究』第15号、昭和38年7月)。
- (B) 同『為季集』(『和歌大辞典』)。
- (23) (A) 三村晃功『松平文庫所蔵『為季集』の成立』(『花園大学研究紀要』第9号、昭和53年3月)。後に注12・Bの著書所収。第二章・第五節、135頁〜152頁。
- (B) 同『為季集』(松平文庫本)。(『古典文庫』393、昭和54年6月)。
- (24) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「為季集」。
- (25) 井上宗雄、注9・Aの著書、補説14、559頁〜566頁。
- (26) 島津忠夫、注22(A)、『光俊集』。
- (27) (A) 安井久善『光俊集 松平文庫本』(『古典文庫』281、昭和45年11月)。
- (B) 同、注3・Dの著書、158頁〜175頁。
- (28) (A) 井上宗雄、注9・Aの著書、補説14、559頁〜566頁。
- (B) 同『中世歌壇史の研究 南北朝期』(昭和40年11月、昭和62年5月改訂新版、明治書院)。830頁。
- (29) 福田秀一、注10の著書。
- (30) (A) 三村晃功『松平文庫所蔵『光俊集』の成立』(『明題和歌全集』所収の新古今歌人の詠歌の考察)。(『国語国文』昭和52年3月)。後に注12・Bの著書所収。第二章・第六説、152頁〜172頁。
- (B) 同『光俊集』(『和歌大辞典』)。
- (C) 同『和歌題林愚抄』から『明題和歌全集』へ。(『花園大学研究紀要』10、昭和54年3月)。後に注12・Bの著書所収。序章、1頁〜26頁。
- (31) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「光俊集」。
- (32) 拙著、注7・A、本文編V5光俊集、研究編第一章・V5光俊集。

- (33) 福井久蔵『大日本歌書総覧 中巻』「第三 家集 為兼卿集」の項。
- (34) 岩佐正「入道大納言為兼卿集は果して誰の歌集か」〔『文学』昭和12年3月〕。
- (35) (A) 谷亮平「為兼集考証」〔『国学院雑誌』昭和12年4月〕。  
(B) 同「為兼集追考」〔『国学院雑誌』昭和12年10月〕。
- (36) (A) 次田香澄「為兼集の成立」〔『文学』昭和12年12月〕。  
(B) 同「為兼集の性格と意義―付・所収歌の作者および出典―」〔『国語国文』昭和38年7月〕。
- (37) 実方清「為兼卿集」〔『群書解題』第十巻、和歌部(四)、昭和36年3月、続群書類従完成会〕。
- (38) 福田秀一「中世私撰集解題(その一)、為兼集」〔『和歌文学研究』第14号、昭和37年10月〕。
- (39) 土岐善磨「為兼卿家集」〔『和歌文学大辞典』〕。
- (40) (A) 井上宗雄「明題和歌全集と為兼・為冬・為定集と」〔『立教大学日本文学』第14号、昭和40年6月〕。  
(B) 同、注28・Bの著書、第四編・第十章、827頁〜830頁。  
(C) 同、注9・Aの著書、補説14、559頁〜566頁。
- (41) (A) 小原幹雄「為兼集乙集の考察」〔『島根大学文学部紀要』昭和46年3月〕。  
(B) 同「為兼集甲集の考察」〔『島根大学文学部紀要』昭和47年3月〕。
- (42) (A) 三村晃功「入道大納言為兼卿集(前集)の成立」〔『花園大学国文学論究』第6号、昭和53年12月〕。後に注12・Bの著書所収。第二章・第七節、172頁〜187頁。
- (43) (B) 同「為兼卿集」〔『和歌大辞典』〕。  
(C) 有吉保編『和歌文学辞典』所収「為兼卿家集」。